

地域の光をデザインする 野に出て生活を学ぶフィールド教育の再考

Design of Regional Lights (Values) – Learning of the life in the field

三橋俊雄
京都府立大学大学院生命環境科学研究科

MITSUHASHI Toshio
Kyoto Prefectural University

1. 94歳の語り部

京都に赴任した1998年の暮れ、北白川でかつて白川女もされていたという吉村きみさん(94歳)からお話を伺う機会もあった。高齢で耳も遠く日常動作もままならぬ小さな身体ではあるが、幼少の頃の京の暮らしの一断片として、90年も前の記憶が次々と鮮やかに蘇ってきた。以下に示す「てまりうた」は、吉村きみさんが1831(天保2)年生まれのおばあさんから教わったという。

「ひーふのさんきち、ひるはうまおい、よるはくつおち、おひめさまがた、りょうちすごろく、おめんかけとて、にわのみみじを、はるとながめて、ほーほけきよとさえずるあすは、ぎおんのにけんじゃやで、ことやしやみせん、はやしてんてん、てまりうた、うたのなかやま、ちよろんごんじゅで、ちゃろくろくろく、ちゃしちしちしち、ちゃはちはちはち、ちゃくはんじゅで、おとすなはずすな、ちょっとちゃくついた、ひーふのみーよの、みずふくてっぽー、はりやのはやし、おいけのちどり、あたごさんのはなは、さくかさかんか、いまさきそーろた、ほながやゆずりは、いーずりいーずりいーずりは、なごやのしろは、たかいしろで、いちだんあがりや、にだんあがりや、よいよいよいこが、さんにんごーざる、いちでよいのが、いとやのむーすめ、にでよいのが、にんぎょやのむーすめ、さんでよいのが、さかやのむーすめ、さかやむすめはきりょうがようて、きょうでいちばん、おさかでにばん、さがでさんばん、よしだでよばん、よしだおとこにだきしめらーれて、くしやこうがい、こちゃもーろーた」

また、吉村きみさんは、小さい頃の思い出から次のような話もしてくれた。京大農学部をつくるときに、お地蔵様がぎょうさんでてきた。そのお地蔵様を粗末に扱ったらみな怪我して、それからおまつりしはった。比叡山からいい石が出て、夫が東福寺山門の前の石灯笼一对、京都市美術館や国立京都博物館の土台の石をつくった。御所の建令門の土台の石の仕事の時には、戸籍謄本を持って身分の保証とした。

「味噌豆たことて、豆炊いて、豆の数ほど、家焼いて、もよもん(屋号)とは、ちーはうちーはう」この話は、「おひたき」という氏神さんの行事があり、ミカン、三角の柚の香りのするオコシやオマン(饅頭)をもらいに行きたくて、頼まれていた豆の火の番を放ったらかしにして火を出してしまった、という話で

ある。

同じく、吉村きみさんの「京のしまつ」についての話である。男は酒呑むが、女は畑で取れたものを食べた。足袋を、親指などずれたところを刺し子して、草鞋を履いて花売りに行くと、皆がきれいに刺してあるなど言ってくれた(白川女の話)。山に行くとき草鞋を編んだ。おばあちゃんが、小さな布を刺して、ぞうきんにして使った。晩の夜なべに、行灯をくると回して、灯明の明かりで着物を継いで継いで、ほかさへん。食事は、誕生日にボウダラ炊くのがごちそうだった。毎日は、野菜を炊いて揚げ豆腐を入れたり、男は酒呑むので、魚が一つ付いた。毎月一日、十五日は、カシワをすき焼きにして食べた。毎月一日は、小豆ご飯だった。ニシンと刻みコブのおかず。「しぼうこぶう(ニシンの渋みと昆布)」は、慎ましく暮らすようにとの意味である。桶のすいてきたものを、川幅が1メートル強くらいで深さ30センチくらいの川に沈め、コイモ(里芋)を入れて、竹の棒を組んだ道具で、芋洗いをした。白川女が頭に乘せていた「箕」は、使い古してきたら、土はこびの道具やちりとりに転用した。

吉村きみさんとの出会いを契機として、筆者の心には、京の文化を基底で支えてきた「普段着」の文化、日常の生活文化の中に、「しまつ」という概念に代表される、ものを大切にしながら豊かさを追求する京の生活哲学、生活美学が内包されているのではないかと、そして、「ちょっと昔の京の暮らし」を体験されてきた京都在住の高齢者の記憶の中にこそ、京の生活文化の貴重な情報が幾重にもしまい込まれているのではないかと、その情報はいまお聞きしておかなければ未来永劫に失われてしまうのではないかと考えた。

2. 宮津市奥波見 山本鉄治ご夫妻の生活

府立丹後郷土資料館の紹介で、宮津市北部奥波見集落にお住まいの桶職人・山本鉄治さん、箆織り・山本はな子さんご夫妻宅に向かう。天橋立を通り過ぎ、山間の集落入り口で車を降りる。急な山道を登ると、深紅の彼岸花がさかりである。切り通しを過ぎた突き当たり、杉林の手前に山本さん宅があった。

玄関先の水場には、山から引いた清水が張られた小振りの木桶に小粒の栗が沈められている。軒先には大きな箆にこの地方独特の細長い茄子と厚肉のピーマンが並べられ、箕にはいんげんのような野菜が干してある。静かである。生活の気配はする



山本鉄治ご夫妻とシヨイコ・筵・箒



玄関先の水場



納屋の方杖(ほうづえ)



砥石の台

が、案の定、家にはどなたも居られない。

裏山の小道を少し登ると、小さな畑が広がり、はな子さんが畑仕事の最中であった。ひとしきり、畑の作物の話をしてから家に戻り、土間から座敷に上がる。ちょうど、桶づくりのタガに使う山竹を手を鉄治さんが戻ってきた。

はな子さんの冬場の仕事は藁(わら)仕事と編み物である。ひと冬の藁仕事は、草履20~30足、オイソ(シヨイコの背ベルト)を人から頼まれて6カケほどつくる。藁を丸めてオイソをこすり、つやとなめらかさを出す「コスリ」の作業がなかなか辛いそうだ。鉄治さんが作るシヨイコの、背当て部分の縄織いもはな子さんが行う。

そして筵(むしろ)織りである。一人で筵1枚をつくるのに3日はかかるという。藁打ちをし、縦糸の藁縄を6尋、64本織う。両側の少し太めのミミナワを織う。横糸に用いる藁は長さ1メートル以上のモチネの藁でないとダメだそう。横糸の藁を途中で繋ぐと、できた筵に穴があいてしまうからである。

次に、集落の共同作業についてお聞きした。「クロアゲ(雪が消え落ち葉等のみぞ掃除)」や「集落の植林(杉の植林、枝打ち、下刈り)」「稲立て(田の水路の掃除)」などは村で行う「総仕事」であった。10月の秋祭りはまだ続けているが、田植え後に行う「サナブリ(ご苦労さん会)」は家により行わないところもある。「地藏盆」「2月2日の火祭り(鉄治さんが4歳の時、村中が火事になり、そのことを忘れないように皆で話をする)」「9月1日の風日(台風がひどかった頃を思い休む)」「虫送り(太鼓をたたいて、ヌカムシオクッタ、フネガタニオクッタと叫ぶ)」「キツネガリ(キツネガエリイツウウロウといって狐を追い出す)」などは、今ではもう行われない年中行事である。

戦時中は、「ジネゴ(稲穂のような櫃(カヤ)の実をこいて、ビンの中で皮を剥いて、臼でひいて団子にしたもの)」を食べたという。隣の「木子」集落との間にある共有林の雑木を切り、焼き畑をして開墾し、蕎麦をつくった。次の年には、小豆、サツマイモをつくった。子牛を連れて行ったら作物を食べてしまったという。炭焼きも行い、牛に背負わせて1里の山道を運んだそう。筵は大切にその寿命が尽きるまで使い尽くされた。畳など使えない時代、板の間は顔が映るほどに磨かれた。冬場は、

その板の間に筵を敷いた。家のものに踏まれて目が詰んだものをカマスに用いた。また、農作物の乾燥用に庭先に敷かれ、何年も使い続けてとうとうそれが破れてきたら、最後にぬかるんだ道に敷いて、自然と土に返った。味噌は3年味噌(塩辛い)として大根やゴンボを漬け、山仕事の弁当のおかずにした。山仕事に箸を忘れたら茅を削って代用した。炭焼きに行くとき、道の生茶を摘み火であぶり、山の湧き水を汲んで土瓶で飲んだ。

先日、郷土資料館に頼まれて、「トウス(糶摺り用土臼)」づくりを再現し、そのほかにもさまざまな農具、民具を再現したとのこと。

土間や納屋には鉄治さん手づくりの竹製ねずみ取りが置かれ、納屋の糠山の中には、タヌキ取りの仕掛けが潜ませてあった。そばには長いベルト駆動の脱穀機が置かれ、驚いたことに、今でも唐箕(とうみ)が現役で使われていた。

鉄治さんお手製の藁箒、藁たたき用の木槌、枝の曲がり具合を利用したシヨイコや納屋の方杖(ほうづえ)、砥石の台など、自然の造形を道具の形状として見立て活用する「プリコラージュ(器用仕事)」によるものづくりが生かされていた。

茄子、ピーマン、栗、らっきょうなど、はな子さん手づくりの山の幸の屋ご飯をごちそうになり、とうとう4時間あまりもおじゃましたであろうか、雨がぼつぼつ降り出してきたところで退出することにした。

車まで送っていただいたはな子さんのもつ雨傘は、まわり中がポロポロで、かろうじて真ん中に布がかかっている程度であった。身なりも質素である。

しかし、ご夫婦の暮らし方や生活環境には、着飾らない自然態の美しさ、力強さ、豊かさが感じられた。また、自然からのいただき物を大切に、用のために自らがづくり、寿命がつきるまで使用する、いわば「使用価値」の世界を見ることができた。そして、何よりも、貴重な作業時間を割いて、われわれを暖かく迎え入れてくれた心の温もりが、これが本当の豊かさの証かと、深く心に残った。

3. 「野に出て生活を学ぶ」フィールドワークの実践

こうして、1998年、吉村きみさん、山本鉄治ご夫妻との出会

表1 環境共生教育演習2008-2014(三橋担当分)一覧

年度	フィールド	参加者	実施日	テーマ	演習内容(ものづくり体験)	演習内容(その他)	住民交流
2008	由良演習(宮津市)	1) 教員(2) 2) 学生(34)	2009・02・16~17(1泊2日)	伝統のものづくり体験を通し環境共生を学ぶ	①ワラ箒づくり、②ミカンモチ作り ③リサイクル紐のカゴづくり	①失禁防止体操を習う ②ロープワークを体験する	由良住民と懇談会(山田山荘)
	大野演習(南丹市)	1) 教員(2) 2) 学生(31) 3) NPO(1)	2009・02・23~24(1泊2日)	大野村の自然共生的生活を学ぶ、体験する	①味噌づくり ②ワラつと納豆づくり ③ぼた餅づくり	①大野の紹介 ②有機農業の取り組みについて ③府大演習林の役割について	大野住民と懇談会(大野公民館)
2009	由良演習(宮津市)	1) 教員(1) 2) 学生(29)	2010・02・26~27(1泊2日)	自然共生のものづくりを由良の高齢者に学ぶ	①孟宗竹を切り竹箸・竹器を作成 ②竹筒炊飯	①竹細工班、②ワラ箒づくり ③ミカンジャムづくり	由良住民と発表会(山田山荘)
	大野演習(南丹市)	1) 教員(3) 2) 学生(45) 3) NPO(1)	2010・03・01~02(1泊2日)	有機農業の取り組みと食づくりを大野の皆さんから学ぶ	①そばと納豆づくり ②味噌づくり ③ぼた餅づくり	①大野の郷土料理の紹介 ②有機農業の取り組みについて ③府大演習林の役割について	大野住民とものづくりを通して(大野公民館)
2010	由良演習(宮津市)	1) 教員(2) 2) 学生(32)	2011・02・22~24(2泊3日)	自然共生のものづくりを由良の高齢者に学ぶ	①孟宗竹を切り竹箸・竹器を作成 ②こんにやくづくり	①由良の自然共生調査 ②由良地区活性化提案	由良住民と発表会(由良公民館)
	雲原演習(福知山市)	1) 教員(3) 2) 学生(31) 3) インドネシア(1)	2011・03・07~09(2泊3日)	雲原のエコミュージアム体験	①そば打ち体験 ②灰汁づくり ③こんにやくづくり ④わら草履づくり	①天座見学と普光寺で鬼伝説の話 ②おくど体験、水車米飯炊き、ぼたん汁 ③シカ・イノシシのワナづくり見学	雲原住民と懇談会(雲原公民館)
2011	由良演習(宮津市)	1) 教員(2) 2) 学生(37)	2012・02・22~24(2泊3日)	由良の地域づくり調査	①由良の伝統料理を学び調理する	①自給自足の生活技術を学ぶ ②各公民館で地域の方々に聞き取り調査 ③由良の地域づくり提案	由良住民と発表会(由良公民館)
	雲原演習(福知山市)	1) 教員(2) 2) 学生(35)	2012・03・05~07(2泊3日)	学校問題を考え、雲原にさらなる活力を生み出す	①水車小屋で料理体験(もちつき、おくどさん)	①獺師の話を用いた道具を見る ②学校問題・地域問題を考え意見交換 ③班ごとに地域再生の提案	雲原住民と発表会(雲原公民館)
2012	由良演習(宮津市)	1) 教員(1) 2) 学生(21)	2013・02・26~28(2泊3日)	由良の地域力について	①孟宗竹を切り竹箸・竹器を作成 ②竹筒炊飯	①炭焼き窯づくりの技術を学ぶ ②各公民館で地域の方々に聞き取り調査 ③由良の地域づくり提案	由良住民と発表会(由良公民館)
	雲原演習(福知山市)	1) 教員(1) 2) 学生(27)	2013・03・12~14(2泊3日)	地域の暮らしと問題を知り、次の世代へつなげるには	①こんにやくづくり ②餅つき ③そば打ち	①雲原・天座地域巡り、大蔵神社 ②獺の道具見学と道具製作について ③天座田楽鑑賞、太鼓練習の見学・体験	雲原住民と発表会(雲原公民館)
2013	由良演習(宮津市)	1) 教員(3) 2) 学生(15)	2013・08・20~22(2泊3日)	由良のお宝発見と魅力づくり	①由良の塩づくり ②小学生との砂像づくり	①由良のお宝(ブチ名所)調査 ②懇談会、③自然教室(由良の植物観察)	由良住民と発表会(由良公民館)
	伊根演習(伊根町)	1) 教員(1) 2) 学生(30)	2014・02・17~18(1泊2日)	エコミュージアムとしての伊根舟屋群の活性化		①保存会会長・「海の京都」座長の講演 ②地元語り部による舟屋の暮らしの説明 ③インタビュー、2地区散策・調査	伊根住民と懇談、インタビューなど
	雲原演習(福知山市)	1) 教員(1) 2) 学生(26)	2014・03・25~27(2泊3日)	地域を見て、聞いて、歩いて、考える	①祭り太鼓の練習 ②調理・餅つき体験 ③新割り体験	①獺師の話を用いた道具を見る ②祭り太鼓指導、「鬼退治伝説」講義 ③地域調査、食事準備、地域再生の提案	雲原住民と発表会(雲原公民館)
2014	由良演習(宮津市)	1) 教員(2) 2) 学生(16)	2014・08・18~20(2泊3日)	自給自足・自分の力で生きることをY氏の生活から学ぶ	①孟宗竹を切り竹箸・竹器を作成 ②薬ほうきづくり	①北前船展示館の見学、②地元の課題を聞き、山田山荘の自給自足の生活を学習 ③ものづくりを通して住民と交流	由良住民と発表会(由良公民館)
	岸谷・白滝演習(舞鶴市)	1) 教員(2) 2) 学生(10)	2014・08・23~25(2泊3日)	中山間地域の生活を体験し農村の文化と習俗を体感する	①地藏盆の飾り付け ②松明行事の準備と参加 ③フキ畑の除草手伝い	①地域の紹介、地区内見学 ②地藏盆の飾り付け、松明づくり ③田の草取りなど住民指導のもと実践	白滝・岸谷住民と発表会(白滝公民館)
	伊根演習(伊根町)	1) 教員(1) 2) 学生(25)	2014・09・08~09(1泊2日)	暮らしと地域課題を学び次世代につなげる方法を考える	①90歳の業職人から菓細工「わーわーさん」「交通安全お守り」の作り方を習う	①保存会会長、「海の京都」座長の講演 ②地元語り部による舟屋の暮らしの説明と散策	住民と懇談会(福祉センター)

いを契機として、丹後半島の農山漁村に伺い「野に出て生活を学ぶ」フィールドワーク(デザイン・サーベイ)の活動が京都で開始された。

フィールドでは、厳しい自然と向き合いながらも、自然と共生してきた人びとの逞しく生きる姿や生活技術、生活文化と出会うことができる。訪れた宮津、京丹後、南丹、福知山等の里山における生活は実に質素で、自然の恵みを受けながら、自給自足的な、身の丈にあった生活が営まれている。そして、海山川の生業において必要な道具を自らの手で作り、自然を楽しむ、感謝する「普段着」の生活文化が、今も健在であった。

こうした地域に出向き、生活の現場から何かを学ぼうとするとき、柳田国男は民俗学の立場から、地域の暮らしを次のように読み解いている。多くの民間伝承は今まで気付かれざりしものの発見、文字以外の力によって保留せられて居る、従来の活き方、働き方、考え方を、弘く人生を学び知る手段として観察する。そして、地域調査に当たって3つの視点が必要であると述べ、「生活外形・目の採集・旅人の採集」「生活解説・耳と目の採集・奇寓者の採集」「生活意識・心の採集・同郷人の採集」をあげている。

フィールドワークでは、前述の柳田の姿勢にならって、例えば、石臼(しうす)を眼前に置いて、まず、その外観、素材、重さなどを調査する「目の採集」を実施する。次に、その道具の謂われ、作り方、使い方など「目と耳との採集」をすすめ、最終的に、その石臼が度重なる飢饉から村人を救った話など、その地の風土を感じながら人びとの石臼に対する心の声を聞く「心の採集」を行う。

このように、教室や書物からでは得られることのできない事象、意味、人の生き方などについて、「生活の現場」に出向いて調査し、感じ、理解する作業がフィールドワークである。

4. 事例「京都府宮津市由良地区演習」

今日、地域において人と自然が深い関係性の中で共生してきた生活技術・生活文化を、次世代にどのように継承していくか、またその価値を当該の地域づくりにどのように活かしていくかが、地域から大学に求められている課題の一つといえる。

2007年8月3日から7日までの5日間、演習「由良の魅力再発見とエコミュージアムづくり」を、由良地区公民館を拠点として地元の方々にお世話いただきながら実施させていただいた。



由良海岸の塩づくり



ゼンマイの葉の飛行機



道端に並ぶお地藏さん



鬼瓦



100歳の語り部



由良石を運ぶソロバン



浜大根の収穫



明日の打ち合わせ



畦道づくり



小学生と田舟レース



高校生と杉の皮むき



ウッドデッキづくり



古電柱で登山案内小屋づくり



ナベツカミづくり



竹炭づくり



コンニャクづくり

演習には、京都府立大学学生 18 名(教員 1 名)、滋賀県立大学学生 7 名(教員 1 名)、加えて本年より宮津高校建築科学生 13 名(教諭 2 名)の計 42 名が参加し、はじめての高大連携の学外演習が実現した。

今回は、由良のかけがえのない「光・魅力」を、現代社会では消えかけている大切なもの、残していきたいもの、これからも発信していきたいものとしてとらえ、それらの「光・魅力」を由良の方々にも、また由良を訪れる外部の方々にも理解してもらい楽しんでもらうための「まちぐるみ博物館＝エコミュージアム」であるとして、次の 6 つのテーマを掲げ調査を行った。各班の内容は、[1 班(9 名)] 七曲八峠と奈具海岸の魅力調査、[2 班(7 名)] 由良の農具・民具の魅力調査、[3 班(7 名)] 宮川の自然、散策道の魅力調査、[4 班(4 名)] 北前船の歴史と船頭の心意気調査、[5 班(10 名)] 駅裏エコパーク開発構想の調査・提案、[6 班(4 名)] 由良の食文化調査・提案とした。

初日は、まず、由良地区を大学バスで巡りながら、山椒大夫屋敷跡、みかん畑、由良神社、如意寺、七曲八峠、グンゼ保養所など、由良の特色を概説いただいた。さらに、夜のミーティ

ングでは、由良自治会、公民館、婦人会、実業会、歴史をさぐる会、食改善推進委員、農業委員の方々 15 名にお集まりいただき、明日からの学生によるテーマ別調査に関して相談させていただいた。

4 日から 6 日までが実質的な調査である。1 班の峠調査では、地元の方々の先導で、古道をふさいでいる竹や枝を斧やのこぎりで切り払いながら、茶屋跡の石垣や崩れかけた石橋に往時の峠道のにぎわいを感じ、また、鹿や熊、イノシシの痕跡を見つけた。また、「ウラジロ(植物)」の群生に歓声を上げたりしながら、由良石の採石場跡を通過して K T R 鉄道の橋脚がそびえ栗田(くんだ)海岸を臨める「三枚橋」まで、約四時間の行程を無事踏査した。2 班の農具調査では、トウミ(唐箕)、手押し種まき機、スキ(鋤)やクツゴミ(藁沓)など昔の農具を調査票にスケッチし、その仕掛けや使い方などを聞き取った。3 班の散策道調査では、由良を流れる宮川、大迫川の自然と散策道の魅力を調査し、サワガニやサンショウウオを探したり、草ずもう、笹ぶね、ゼンマイ飛行機などの草遊びも体験した。4 班の北前船調査では、航海の安全を金毘羅神社への絵馬奉納や女房たちの毛髪を奉納

して祈願した、海に対する由良人の切なる思いを伺い知ることができた。5班のエコパーク構想では、駅裏の深田を利用した自然体験学習型の施設や空間デザインの提案を行い、6班の食文化調査では、「あずきざい」「のっぺい」「てっぽう和え」「タニシの佃煮」など、郷土の料理づくりや新しい食材の提案・試作を行った。

このようにフィールドワークでは、由良の歴史や自然と共生してきた人びとの暮らしの中から、潜在的な資源・価値を再発見し、地域内外の、例えば由良住民と都市住民や学生との交流を通して、その価値を学び、伝え、共有していくために、「地域の光をデザインする」「エコミュージアムによる地域づくり」という観点から、元気で誇り高い地域になっていただくためのデザイン(調査・解析・創造的提案)を行ってきた。

5. 「環境共生教育演習」の実践

筆者が続けてきたフィールド教育の活動は、2008年、座学とフィールドワークを組み合わせた教養教育科目「環境共生教育演習Ⅰ・Ⅱ」として位置付けられ、開始された。演習は、全学部1・2回生を対象として開講し、研究領域の基礎的な知識、地域と触れあうためのマナーや調査方法、調査フィールドの概要等を講義により修得し、加えてフィールドにおける学外演習を通して実地体験を行う、前後期各2単位の「講義+学外演習」型の選択科目で、2泊3日程度の学外演習を含む。

2014年度前後期の環境教育演習Ⅰ・Ⅱは、延べ13名の教員が担当し、履修学生数は本学1回生400名に対して約400名が履修(うち100名程度が前後期履修)している状況である。表1に、筆者が担当した環境共生教育演習の概要を示す。

この科目は、豊かな自然、生活文化、地域共同体が今も残る京都府の農山漁村をフィールドとして、地域の自然、暮らし、産業、ひと、歴史文化と共生していくための、体験学習型環境共生教育の基礎科目として位置づけ、その目的は、持続可能社会を探求するための「環境と共生する力」を、フィールド演習体験により「感動し」「行動する」ことを通して、地域と共に学ぶことにある。さらに、農学、生態学、文学、デザイン学、建築学等の学際的視点から、里山の自然や生活文化の保全・再生、地域活性化に向けた環境問題の諸相に立ち向かい、ひと・社会・地域・自然の関係性を理解し、問題を解決する力、環境共生型のライフスタイルを創造する力、NPO活動等を通して地域活動に参画する力を養うことを目指すものである。

6. 「遊び仕事」という自然との付き合い方

「野に出て生活を学ぶ」というフィールドワークの目線から、学生たちと丹後半島の農山漁村を訪れ、その地で自然と共に暮らしてこられた方々から、自然との付き合い方や生活の知恵、

ものづくりの知恵などについて教えていただいた。

そうした活動のなかで「遊び仕事」と出逢う。遊び仕事とは、われわれも自然の一部であるという観点から、自然や環境のあり方を問う前に、まず、自然と人間の関係のあり方を問い直す、環境倫理学的ななかから生まれた「視点」である。

「遊び仕事」とは、例えば、海でのタコやイカ釣り、山でのウサギ狩りや山菜採り、川でのウナギやサケ捕りなど、大人たちがわくわくと胸おどらせながら自然のなかに身を置き、獲物との出逢いを求め、同じ土俵で相手と向き合い、そして捕まえ食べてしまう、そういう人間の行為である。

【タコ釣り】食べたいと思ったらマダコを釣りに行く。船を出さずに気軽にとれるので毎日行く人もいるようである。雨上がりには、なぜかマダコは止まるたびに体の色が真っ白になり、すぐ見つけることができる。この絶好の機会をのがさないように、雨が止むとタコを探しに急いで堤防に駆けつける。

【ウサギ捕り】けもの道に太めの針金で輪をつくり、雪の上10センチくらいの、ちょうどウサギがはねる高さにしかける。毎日捕れているか見に行くとのこと。ひと冬で10羽ほどの収穫があり、調理して食べる。

【手長エビ漁】6月から12月まで由良川で手長エビ漁が行われる。モンドリ(捕獲カゴ)に餌のサナギを入れて由良川べりに10基ほど沈めておき、2日に1回仕掛けを引き上げると、ひとつのモンドリに7~8尾、計80尾ほどの手長エビが捕れる。この漁を教えていただいた方は、現在でもこうした漁をはじめ、さまざまな自給自足的な生活を実践しておられる。

現代人の生活が自然からますます遠退き、それゆえに自然が荒廃しつつある今日、このように、農山漁村の伝統的な生活文化として息づいてきた遊び仕事は、貴重な自然共生的行為であると同時に、今では絶滅危惧的民俗文化であるとも言える。また、遊び仕事は、それを可能ならしめてきた豊かな自然があることの証しでもあり、その自然を保全することなしに、遊び仕事は成り立たない。遊び仕事は、現代の我々に、自然と対等な立場で相手(タコやウサギや山菜など)と向き合い、捕まえて食べるという、まさに自然と身をもってつながることができる「生身」の、自然共生体験の場としての役割を担っている。

7. 「サブシステム(自立自存)」な生活

筆者はもう一つ、丹後の農山漁村の生活が、イヴァン・イリイチの言う「サブシステム」な生活であることに気付いた。「サブシステム(subsistence)」とは、人間生活の自立自存を志向する人びとの文化に見られる、特に交換を意図しないで、人びとがそれで十分こと足りて心も満たされる、自立的・非市場的な活動を意味する。それは、現代社会に見る「サービス漬け」の生活に対して、自分で歩き、自分で学び、自分で身体を



藁箒



手長エビ漁のモンドリ



しゃっくりに効く柿の蒂(ヘタ)



腐らない栗の木のシラタ(白肌)

治す、そうした生き方の大切さを示すキーワードである。そこには、市場の「ニーズ」ではなく、自らの「必要」に対して自らが行動する「我唯足を知る」生き方でもある。

前述の桶職人・山本鉄治さんの話である。木枯らしが吹き始めた晩秋、薪の束を高く積み上げた「ニウ」を見上げて「これでこの厳しい冬を越せる」と感じたという。まさに、鉄治さんにとっては「ニウ」が冬を越すために不可欠な使用価値であり、それ以外のなにもでもなかったのである。

また、雪の重みで曲がった根曲がり材を、田んぼ脇の農具小屋の屋根を支える「方杖」として利用したり、木の幹と二つに枝分かれした「三つ叉」のところに、道具(砥石の台)として生かし、今でも使い続けている「ブリコラージュ」の知恵も、この桶職人から学ばせていただいた「サブシステム」な知恵である。

フィールドワークを通じて、地域の自然と共生してきた人びとの生き方から、さまざまな生きる「術(すべ)」、生きる「智恵」を教示いただいた。その中から、我々が現代社会において「サブシステム(自立自存)」な生活を成り立たせていくための要素を抽出し、以下に示す。

- 1) 自給自足(self-sufficiency) : 米・野菜・果樹など食材の多くは購入しないで自給する。藁箒・石臼の引き手などの道具は周囲の自然から素材を採取し、自らの技術・技量で制作する。
- 2) 必要十分(sufficient) : 海・川の漁や山菜採りなど食べられる量だけ採取する。
- 3) 共同体的規範(community rule) : 手長エビ漁の仕掛け(モンドリ)は20基以内とする。「山の口開け」など、狩猟や採藻の適期を集落共同体が定め、そのルールを守る。
- 4) 自己規範(self standard) : タラの芽は同じ部位から3度摘まないなど、自然資源を守り活用するための自らの「体験知」に準じた行動を取る。
- 5) もったいない(Don't Waste) : 浜でほかす雑魚を調理する。しゃっくりに効く柿の蒂(ヘタ)はとっておく。栗の木のシラタ(白肌)は皮が腐っても芯は腐らず杭などに利用する。
- 6) 備え・保存(preservation) : 筍・ミョウガなどを塩漬けに、ゼンマイ・椎茸などを乾物に、米・塩・梅干・薪・藁・竹

などを備蓄・保存する。

- 7) 非市場経済(Non-market economics) : できるだけ自然から採取し、お金を使わない、市場経済に頼らない生活をする。
- 8) 互酬性(Reciprocity) : 食材や物資は、物々交換やお互いの精神で、集落共同体の中で共有する。

折しも、東日本大震災が社会に与えた衝撃と影響は、日本人の生活スタイルや価値基準を大きく揺るがし、本来的な暮らし、本来的な社会のあり方は何かを摸索しはじめたところでもある。

そうした、まさにどう生きるか、What to Design、何をなすべきかが問われる現代にあって、生活の「現場」に臨み、五感を総動員してそのありようを総合的に感得することのできるフィールドワークの実践は、デザイン学の今後にとって、必要不可欠な方途であるにちがいない。

【参考文献】

- 1) 鬼頭秀一、自然保護を問いなおす、ちくま新書、1996
- 2) 鬼頭秀一、環境の豊かさをもとめて・理念と運動、鬼頭秀一編、講座・人間と環境第12巻、1999
- 3) 松井健、マイナーサブシステムの世界、篠原徹編、民俗の技術、朝倉書店、1998
- 4) 松井健、自然観の人類学、榕樹書林、2000
- 5) 篠原徹、民俗の技術、朝倉書店、1998
- 6) 三橋俊雄、内発的地域開発計画の特質-過疎地域・新潟県山北町における実践を通して、デザイン学研究 No. 80、1990
- 7) 三橋俊雄、ものづくりを通じた自然と人間の共生に関する行動と観念-福島県三島町の自然に働きかけるものづくりの実態調査を通して、デザイン学研究 No. 113、1996
- 8) クロード・レヴィ=ストロース、野生の思考、みすず書房
- 9) イヴァン・イリイチ、シャドウ・ワーク、岩波書店、1990
- 10) イヴァン・イリイチ、ジェンダー、岩波現代選書、1984
- 11) 郭洋春 他、脱「開発」へのサブシステム論、法律文化社、2004
- 12) 野林厚志、イノシシ狩猟の民族考古学-台湾原住民の生業文化、お茶の水書房、2008